優良農家紹介

おいしいぶどうづくりに親子で切磋琢磨

豊岡市近郊では昭和30年代からぶどうが栽培され、現在約15ha栽培されている。その中でもまとまって栽培されているのが金剛寺集落で、約４haあり、うち2.5haは水田転換園である。この金剛寺集落で、親子二代でぶどうづくりに励んでいる北垣篤二氏、威司氏を紹介する。

１ 経営概要

労 働 力：本人・長男

経営規模：	水田転換園	85a
	傾斜地園	50a
	水　稲	50a
	合　計	185a
品　種：	ピオーネ	85a
	紫　玉	10a
	その他（藤稔等）	40a

販売方法：市場出荷50％、直売50％

平均収量：1.8～2.0t／10a

秀 品 率：70％

２ 栽培の取り組み

北垣篤二氏は昭和35年に里山を開墾してぶどう栽培を始めた。傾斜地園でのぶどう（ベリーＡ中心）65aと水稲120aの経営であったが、昭和62年長男の就農希望と転作の特例措置の実施を受けて水田転換ぶどう園（50a）を造成した。

３ 高品質のぶどう作りを目指して

(1) 排水対策

水田転換園では排水が悪いため、造成前に４ｍ間隔に幅40cm、深さ１ｍの溝に竹、古瓦、籾殻を埋め込む簡易暗渠の施工を行った。

(2) 土づくり

毎年秋に10a当たり２tの牛糞堆肥（１年堆積し、３回切り返したもの）を施用している。近年は雑草の堆肥（但馬空港で排出される雑草を堆積したもの）も利用している。

(3) 簡易ハウスの導入

平成３年、簡易ハウスを50a導入した。栽培管理が一部被覆に比べて10日程度前進することで、労力分散が可能となり、適期を逃がさずに作業できるようになった。また、雨よけ部分が他に比べ大きいので、病害虫の発生が減少した。

(4) 品種選定

大粒系品種を中心に、直売、宅配による販売を行っているため、直接消費者から寄せられる意見を積極的に取り入れ、新品種導入の目安としている。現在、紫玉、藤稔を中心に、青系（ロザリオビアンコ）、赤系（安芸クイーン）を試作している。

４ 親子での作業分担と相互研鑽

篤二氏はたじま農協葡萄部の役員を永年務め、地域では最高の技術者として信望が厚い。

親子であり、師弟である二人だが、それぞれ責任分担するほ場で実践し、父親の実績と、長男の新たな探究心をお互いにぶつけ合い、土づくりや深耕方法、開花前の摘心の良否、環状剥皮による着色向上、病害虫防除方法等、技術向上、研鑽への論議が絶えることがない。おいしいぶどうづくりに懸けた熱き思いは誰にも負けない二人である。

松田　喜彦（豊岡普及センター）

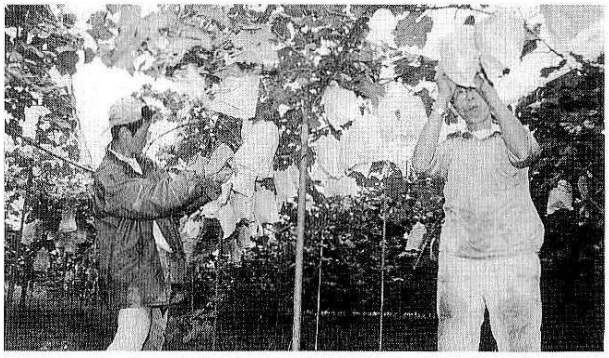

図　栽培管理に自然と力が入る